

理学部

2007
JUNE

KYUSHU UNIVERSITY
mail magazine for alumni

便り

Vol.5

理学部、この一年。

Latest News of Departments

物理学科／化学科／地球惑星科学科／数学科／生物学科

SSP採択 採択事業の紹介「物理・化学、数学」／SSP採用者の紹介

News 主な各会の受賞者／理学部・理学府の就職支援／新キャンパス移転情報
定年退職者／新任教官

理学部、この一年。



理学部長 宮原 三郎

理学部便りVol.4を昨年度発刊して以来、1年が経過致しました。この1年の間で理学部に関係する最大のニュースは、六本松地区が伊都キャンパスに直接移転することが決まったことでしょう。現在は六本松地区で実施されている全学教育が、平成21年4月より伊都キャンパスで行われることが決まりました。これに伴って、平成21年4月には、理学研究院教員は箱崎地区に、数理学研究院教員は伊都キャンパスに、それぞれ拠点を構え教育研究に携わることになりました。それと同時に、理学部数学科の教育は伊都キャンパスで開始されることも決まりました。理学研究院、理学府および理学部の伊都キャンパス移転は平成26年度から2年をかけて行われる予定になっており、理学部に関係する全ての移転が完了するまでには今しばらく時間がかかりますが、学生の教育を最優先に考え、この過渡期を乗り越えていく所存です。

理学府では高度な専門教育の実施を基礎として、前号で紹介しました「フロントリサーチャー育成プログラム」による先端研究者育成、「アドバンスサイエンティスト育成プログラム」による高度職業人育成を目的とした理学府再編を計画しております。また、数理学研究院では、21世紀COEプログラム「機能数理学の構築と展開」の成果を生かし発展させる「産業技術数理研究センター」が発足しました。理学・数理学の両分野の大学院教育で、研究者育成のみではなく、広く社会で活躍できる人材の育成を目指した改革が始まっております。このような活動に対する理学部卒業生の皆様の一層のご理解とご支援をお願いする次第です。

S / S / P 採 択 事 業

世界的研究拠点を目指す研究機関において、テニュアトラック制*に基づき若手研究者に競争的環境の中で自立性と活躍の機会を与えることを目的とした、国の科学振興調整費事業「若手研究者の自立的な研究環境整備促進事業」として、九州大学が推進する「次世代スーパースター養成プログラム (SuperStar Program)」に「時空間階層生命科学」、「数学・数理学における未解決問題挑戦プロジェクト」の2つのプロジェクトが採択されました。

*期限付きのポストで雇用し、一定期間の後に資格審査を行い、パーマネントの職を得るもので、SSPでは5年間の特任准教授の期間を経て、昇任審査後、准教授に着任する予定である。

「時空間階層生命科学」

平成18年度から、理学研究院「物理学部門」と「化学部門」が協同して「時空間階層生命科学」というテーマでSSPプロジェクトを推進することになりました。よく知られているように生体系には原子レベルから細胞・生体組織レベルに至るまで、さまざまな時空間スケールで静的および動的な構造が階層的に存在し、これらの競合と協調により高度で多彩な生命現象が営まれています。本プロジェクトでは「生命の時空間階層構造」をテーマに、従来の学問分野および研究手法の枠組みを越えて、統一

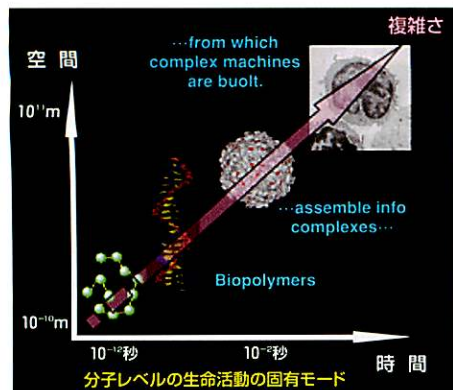
的かつ学際的な研究を展開して行きます。

このため、特に物理分野として極限環境生命科学、非平衡生命科学の2つの分野、ならびに化学分野として理論生命科学、動態

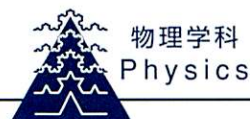
生命科学の2つの分野の計4つの分野に的を絞り、生体分子複雑システムとしての生命の構築原理を解明し、生命科学の新たな基盤を確立することを目指すものです。

物理、化学の学問的方法論は現代の産業を支える基盤として物質科学分野では十分な貢献をしてきました。一方、21世紀は「生命の時代」ともいわれ、今後ますます学問の対象としての重要性が増す分野であると言えます。生命現象を分子レベルに立ち返り理解しようとする「化学的手法」によるアプローチが生命の理解を爆発的に進めてきました。このような従来とは違った分野の手法や方法論を持ち込むことで今後も生命現象の理解が深まることが期待されます。このような中で我々は、生命現象の階層性に注目して、分子から細胞さらには個体に至るマルチスケールの現象をシームレスに(継ぎ目なく)理解するための手法や方法論の開発がぜひ必要であると考えて、上記の新しい各分野で今後、世界的なレベルで中心的な人材となる研究員を集め、新たな生命科学の拠点形成を目指したものです。

プロジェクト推進責任者:理学研究院 木村康之



生体分子の時空間階層構造の例

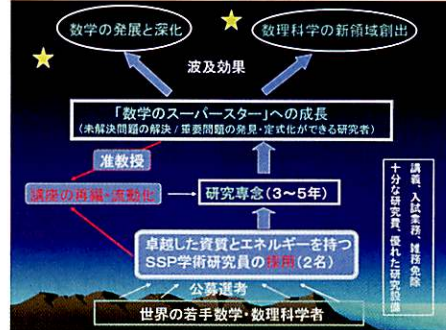


「数学・数理化学における未解決問題挑戦プロジェクト」

3名以上が組むプロジェクト研究プログラム?学内公募が始まった昨年6月、はじめは、数学は関係ないよなと思いましたが、しかし考えてみると、常識的な意味でのプロジェクト研究というのでなくとも、数学の開拓という意味でのプロジェクトなら意味があり、またスーパースターというのは数学なら大いに考えられる。そう思い直し、人数を2名に減じて応募資格ありとの了承を得ての申請でした。プログラム名『数学・数理科学における未解決問題挑戦プロジェクト』を口にしたときには、呆れ顔をした同僚もおりましたが、エイヤーとばかり。その趣旨は、21世紀の数学・数理科学の未解決問題にその才能とエネルギーを降り注ぎ、必要があればみずから定式化・デザインし、独創的なアイデアに基づき挑戦するというものでした。結果として、短い公募期間にも拘らず国内外から100名余りの応募があり、趣旨に沿った優れた研究者2人を採用することができました。当時数理学研究院の助手であった高木俊輔さん(予想の解決)と東大医科学研究

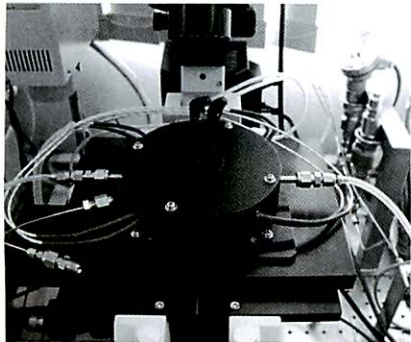
所研究員であった吉田寛さん(新領域開拓)です。それ以降、予算執行が少々厄介な振興調整費に時折振り回されながらも、お二人の着実な研究進展の様子を目にして申請は間違いなかったと思っていますところでは。

プロジェクト推進責任者:数理学研究院 若山正人



SSP採用者の紹介

物理



向井貞篤 SSP研究員

私は前職(独立行政法人海洋研究開発機構)において、高温・高圧環境下におけるコロイド粒子挙動に関する研究を行ってきました。高温・高圧環境下において、水の性質は、通常の状態とは大きく異なります。例えば、水は比誘電率が非常に高い物質(約80)として知られていますが、高温・高圧の超臨界状態では、有機溶媒程度(約10)まで下がります。比誘電率は、コロイド粒子間に働く静電反発力やファンデルワールス引力に影響を与えるため、超臨界水中でのコロイド挙動は、通常とは大きく異なります。私は40MPa、400℃の条件で使用可能な高温・高圧顕微鏡セルを製作し、このような極限環境にお

けるコロイド挙動の可視化を行ってきました。本年1月より九州大学に赴任し、こちらでは高圧環境下でのソフトマター物性に関する研究を行う予定です。現在300MPa(目標値)という高圧条件と、100℃程度までの温度制御機能を持つ顕微鏡セルの検討を行っています。このようなセルを用い、脂質2分子膜や高分子ゲルが圧力転移する際のマクロな形状変化、または超好熱菌などの極限環境微生物の直接観察を行います。加えて海洋研究開発機構との協力体制を築き、引き続き、高温・高圧環境下でのコロイドに関する実験も行う予定です。

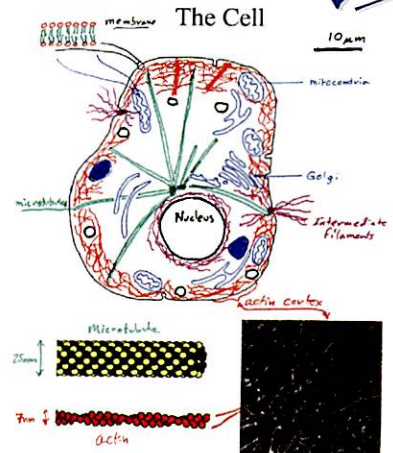
水野大介 SSP研究員

これまで私は、細胞骨格の非平衡力学物性の研究に取り組んで参りました。細胞骨格とは剛性を持った蛋白質フィラメント、その上で働くモーター蛋白質、クロスリンカーからなる複合ネットワークです。この細胞骨格は、細胞に力学的強度を与えるとともに、内部で自発的にエネルギーを生成することで、細胞の多様な力学的機能(運動、輸送、信号変換等)を駆動しています。平衡状態にある「死んだ細胞骨格」の物性は、構成物質により一意に決定されます。しかしながら非平衡状態にある「生きた細胞骨格」の力学物性は、内部でのエネルギー発生に伴い大きく変化します。細胞は、内部で発生させたエネル

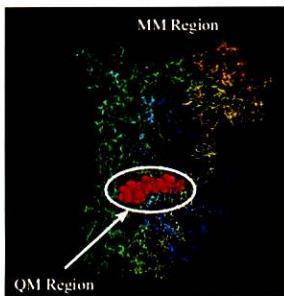
ギーを力学的な仕事として直接消費するだけでなく、物質変換を伴わずに自らの性質を大きく変化させることで、これを間接的に機能促進に利用しているのです。

私はこれまで非平衡ゲルと呼ばれる、ミオシン・架橋剤・ATPが混合したアクチンゲルを利用してその動作原理を調べてきました。九州大学ではさらに一歩進めて、細胞骨格やDNAを小胞体中に封入したより細胞に近い試料(人工細胞)を製し、その力学物性やDNAの複製等の機能が、非平衡度や内部での力発生により制御されるメカニズムを解明したいと考えております。

物理



化学



私は、これまでに大規模分子系の高精度計算を目指した計算手法の開発、及び、大規模分子系の分子動力学シミュレーションについて研究してきました。

生体分子などの大規模分子系について

は、通常非経験的な分子軌道法で取り扱った上での高精度計算は計算コストが莫大になってしまうため、不可能であるのが現状です。私は化学的に重要な系の領域を高精度の量子化学計算(QM)、他の領域は計算コストのかからない古典的(MM)に扱うQM/MM法を使うことにより、電子状態計算の質を保ちつつ、計算コストを抑えながら高速に計算できる手法を開発してきました。大規模計算と高精度計算が両立できることの可能性を見出しました。

また、生体分子のような大規模系の分子動力学シミュレーションを行う際、ポテンシャルエネルギー面には小さい孤立分子系とは異なり、局所安定状態が数多く存

在します。大規模系分子のシミュレーションではトラジェクトリが局所安定状態にトラップされないことが必要不可欠です。私は、拡張アンサンブル法を用いることにより、局所安定状態にトラップされることのない、効率のよい大規模系の分子動力学シミュレーションに成功しています。

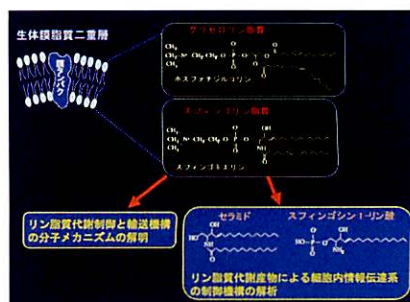
私は、本プロジェクトでは、生体分子など大規模な系の定量的電子状態理論の開発を行います。これまでのQM/MM法を用いた電子状態理論の研究と拡張アンサンブル法を用いた分子動力学シミュレーションの研究の双方の経験を生かし、他のグループと密接に連携を取りつつ、分子の高精度電子状態理論と大規模生体系シミュレーションとの統合を目指しています。

谷元洋 SSP研究員

生体膜は、生命の基本単位である細胞の外界との境界あるいは細胞内での様々なコンパートメントを区切る働きをもっています。リン脂質は、生体膜脂質の基本骨格であるだけでなく、細胞の様々な機能調節に必要な情報伝達に関与していることが指摘されており、現在盛んに研究が行われています。しかしながら、現在のリン脂質研究における大きな未解決問題の一つは、生体膜リン脂質がどこでどのようにして量的制御を受け、細胞内の目的の場所に輸送されるかという基本的な疑問点です。私はこれまでに、生体膜リン脂質の一つであるスフィンゴリン脂質より生理活性脂質であるセラミドやスフィンゴシン-1-リン酸を生成する鍵酵素である中性セラ

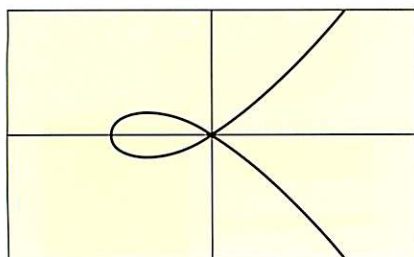
ミダーゼと中性スフィンゴミリナーゼの細胞内局在、トポロジー等を含む分子レベルでの性状解析を行ってきました。特にその中で、これらの酵素を介した脂質代謝が生体膜の外側か内側のどちらで起こるのか、あるいは細胞のどのオルガネラで行われるのか、すなわち「脂質代謝が行われる場所」に注目して研究を行ってきました。今回のプロジェクトでは、研究対象をスフィンゴリン脂質だけでなく生体膜の主要リン脂質であるグリセリン脂質にまで広げて、これらの脂質の代謝制御と輸送機構、及び細胞内情報伝達系への関与について研究を行っています。本研究では、特にリン脂質代謝酵素が細胞のどこでどのような制御下で機能するのかについて

化学



着目するとともに、生成されたリン脂質の生理機能や細胞内輸送の分子レベルでのメカニズムを、動物細胞や出芽酵母を用いて調べることが目的としています。

数学



私の専門は代数幾何学です。代数幾何学とは、代数多様体と呼ばれる、方程式の零点集合で定義される図形の性質を調べる学問で、代数多様体を(何らかの意味で)分類することが、代数幾何学の究極の目標と言えます。この分類を行う上で避けては通れないのが、特異点の取り扱いです。特異点とは、簡単に言ってしまうと、滑らかでない点(尖ったり、交叉している点)のことで、例えば、 $y^2 = x^3 + x^2$ という代数多様体は、原点(0,0)に特異点を持ちます(図参照)。特異点とは厄介な代物で、滑らかな代数多

様体に対して成り立つことが、特異点を持つ代数多様体に対しては成り立たないということがしばしば起こります。しかしながら、滑らかな代数多様体だけ分類しようと思っても、分類の過程で特異点が現れてしまうのです。というのも、代数多様体を分類する上で極小モデルと呼ばれる特別な代数多様体が重要な役割を担うのですが、極小モデルは一般には特異点を持ちます。逆に言えば、極小モデルの特異点の構造を理解することが、代数多様体の分類につながるのです。私はこのような特異点の構造を研究しています。

高木俊輔 SSP研究員

(a) 多細胞における再帰的増殖と形態の多様性の両立条件

一方程式の導出に向けて

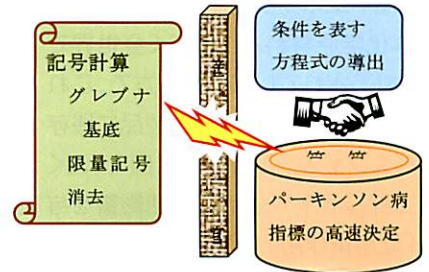
「個体としての再帰的増殖」と「形態の多様性」は、矛盾を内包した属性です。なぜなら、もし、再帰的増殖がなければ、生命とは呼ぶことができませんし、一方、一タイプの細胞だけで構成される細胞群は、一タイプだけの細胞を増殖させさえすればよく、その意味で再帰的であるけれども、そのような細胞群は、形態の多様性を持たず、多細胞とは呼ばれないからです。本



研究の目的は、これら矛盾を内包した属性の両立条件を「方程式」の形で導くことです。

(b) 薬物動態の代数的手法による解析
パーキンソン病のコンパートメントモデルにおける代数的アプローチに基づく反応定数決定を行っています。このモデルは13個もの決定すべき反応定数を持つため、実際のデータを反映させてこれらの定数を決定することは困難であり、これまでほとんど行われていませんでした。この問題に対し本研究は、指数級数の観測データへのフィッティングとそのラプラス変換、および代数的アプローチで構成される手法(グレブナ基底)により、これら

の定数の高速決定に成功しました。これにより、パーキンソン病の診断を、動脈血の採取無しに、かつ、迅速に実行できることが期待されます。また、PETによる被曝時間が低減する可能性もあります。



Latest News of Departments

物理学科 Physics

不安定核物理の理論的研究に対する新展開

物理学科卒業生の肥山詠美子准教授(奈良女子大)が2006年度(第21回)西宮湯川記念賞を受賞しました。

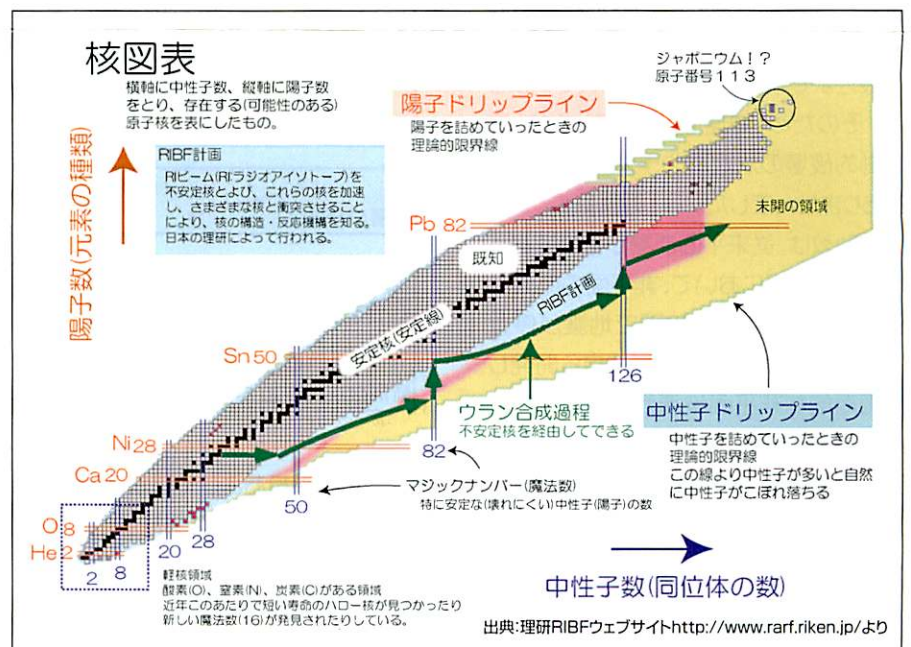
物理学科では、2005年の国際物理年には子供向けイベントを主催し、2006年度には子供向けホームページ「サイエンスクエア・キュー」を開設しました。この間に、物理学科では3人の教授を迎え、研究・教育の推進を進めています。その一端として、今回は核物理の動向について報告します。

現在の核物理学における最も大きな課題が不安定核の解明です。図において、黒い点は安定核を表し、二つの線の間にある灰色と黄色の領域が不安定核領域です。安定核に比べて非常に多くの不安定核が存在します。このため、安定核とは大きく異なった性質をもつ不安定核が多く存在すると考えられています。緑の矢印は、超新星爆発時で生成される不安定核とその生成経路の予想線で、不安定核の解明は宇宙進化における重元素の起源の解明にとって不可欠です。九大

核理論グループは全国的組織を作り、理研実験グループと協力して研究を推進しています。グループの一員で、九大出身の肥山詠美子氏(奈良女子大)

が、2006年度西宮湯川記念賞を受賞したことは、グループにとって大きな力となっています。

物理学科



「ビスフェノールA受容体の発見」 環境ホルモン問題の新展開

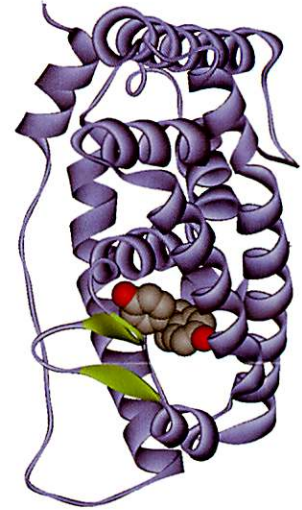
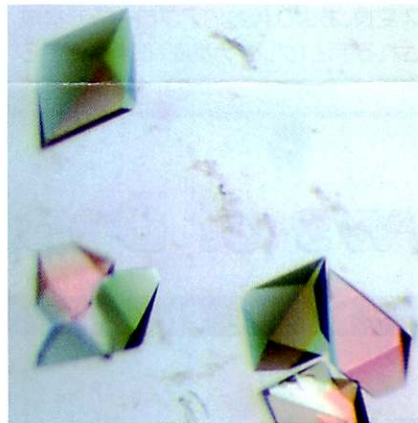
化学科



下東康幸研究室。「核内受容体」分子科学研究がビスフェノールAの低用量問題解決の端緒を切開く。

ビスフェノールAは、ポリカーボネート樹脂やエポキシ樹脂の原料であり、優良な化学原材料として広く全世界で生産、加工されています。一方で、これらから造られるプラスチック製品に残存するビスフェノールAが漏れ出て、ごく微量で脳神経系や生殖系で悪影響を与える「低用量作用」を及ぼすと考えられています。しかし、原因となる受容体応答がまったく分からず、長く論争されていました。下東教授の研究室では、ビスフェノールAがエストロゲン関連受容体 γ 型(ER γ)に結合することを世界に先駆けて発見し、これらの結合体の結晶化にも成功しました。この受容体は胎盤に際立って多く、また、胎児の脳に非常に多いことから、胎児や乳幼児に

懸念される脳神経系での悪影響について、その解明の鍵を握ると思われています。この発見は、テレビ、新聞、インターネット等で広く報道され、今、世界的な研究の新展開が期待されています。



① X線結晶構造解析
ビスフェノールAとER γ 結合体の結晶構造解析。SPRing 8で解析し、結合ポケットでの分子間相互作用を解明。

② 結合体の結晶
ビスフェノールAとER γ 結合体の結晶

地球惑星科学科 Earth and Planetary Sciences

地震発生の物理 「非平面地震断層の動的破壊シミュレーションの研究」

地球惑星科学科

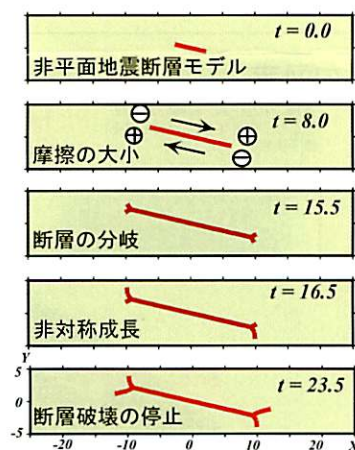


亀 伸樹助教が平成19年度
科学技術分野の文部科学大臣表彰若手科学者賞を受賞!

地震停止機構の解明は地震学における最も根源的な問題の一つですが、つい最近まで未解決のまま残されていました。そのため、物理モデルに基づく地震の動的破壊の決定論的予測は現実的ではありませんでした。

亀助教は、従来平面断層が常識であった地震学分野において、非平面の断層形状という新たな発想の下で地震が停止する動的破壊モデルを作り、自ら開発した画期的な非平面破壊計算法によりそれを検証しました。これより地震の予測シミュレーションが原理的に可能になり、非平面断層モデルは震源研究の標準となりつつあります。

本研究成果は、活断層調査において蓄積されてきた断層面形状情報を、将来発



動的破壊シミュレーションにおける非平面断層形成のスナップショット

生する地震規模およびそれより生じる強震動の予測に対して定量的に活用する方針を示しました。これにより今後の地震リスクの定量化に向けての進歩が期待されます。



産業界と数学との新しい連携を求めて

数学科



数学という学問が直接産業界に貢献できる体制を確立し、新しい数学カルチャーの創成をはかる

本センターは、平成19年4月1日をもって、九州大学学内共同教育研究施設として発足いたしました。その背景には、大学院数理学研究院・数理学府で推進してきた21世紀COEプログラム「機能数理学の構築と展開」にもとづく教育研究拠点形成事業の成果があります。さらにその背景をひもとけば、昭和17年に設置された九大理学部数学科の純粋数学と応用数学のバランスのとれた教育研究の伝統にまでさかのぼることができます。数学は本来、社会の幅広い分野と密接な関わりもつ学問ですが、我が国ではこれまで大学の数学関係の教育研究者集団が、自ら進んで産業界との間で、人材育成を含めた教育と研究の系統的な連携組織の構築を旨とした例は皆無でありました。

本センターに設置された機能数理学研究部門および技術数理研究部門の二つの部門では、他の学問分野、特に産業界における数理的問題に関する学際的共同研究の企画とその実施が推進されます。また、今ひとつの研究教育支援部門では、企業等における3ヶ月以上の長期インタ



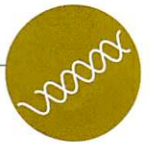
ーシップ制度を活用して、産業界で活躍できる博士レベルの数理的若手研究人材の育成支援を行います。

本センターには、今こそ数学という学問が直接産業界に貢献できる体制を整備し、新しい数学カルチャーを創成したいという強い願いが込められているのです。

生物学科 Biology

育て!次世代のスーパースター! 新カリキュラムスタート

生物学科



多様化する生物科学分野の将来の担い手を育成するため、新しい教育プログラムの創成を進めています。

今年度の新1年生から生物学科における学士教育のカリキュラムが一部変更になりました。2年前期までは、人文、社会、自然科学、外国語などの教養科目や基礎科学科目を学び、2年後期から専門科目、実習、および演習を受講することに関しては、これまでのカリキュラムと同じです。変更されたところは、3年次に、共通専門科目や実習だけでなく、「高次生命機能コース」と「生物多様性コース」のどちらかひとつを選択して、

専門性の高い科目群を受講することにあります。ここで、習得した最新の生物科学の情報や知識を基盤として、4年生になると各研究室に配属され、卒業研究に取り組むことになります。一方では、これまでと同じように、生物学科で指定された教科に関する科目を履修することで、中学校または高等学校の教諭一種免許状を取得することができます。

受賞一覧

藤佐庸教授がアメリカ芸術科学アカデミーの外国人名誉会員に選出


理学研究院生物科学部門の藤佐庸教授がアメリカ芸術科学アカデミー(The American Academy of Arts Sciences)の外国人名誉会員に選出されました。アメリカ芸術科学アカデミーは1786年に創設され、その会員となることは、その時代の最高の影響力の象徴として、合衆国内では最高の栄誉のひとつとなっています。今回、学術及び芸術分野、官民の各機関で活躍する175人が会員として、また、20人が外国人名誉会員として選出されました。

Curriculum

入学 1年	2年前期	2年後期	3年	4年	卒業
教養科目	生物学科 専門科目 実習・演習	高次生命機能コース 専門科目 共通専門科目・実習 生物多様性コース 専門科目	卒業研究 (研究室配属)	大学院進学	就職
基礎科学科目					
基礎生物学科目					

【主な各会の受賞者】

- 肥山 詠美子(物理部門・(奈良女子大准教授))
2006年度 西宮湯川記念賞
- 石黒 慎一(化学部門・教授)
2006年度 九州分析化学学会賞(2006.11.24)
- 迫田 憲治(化学部門・助教)
平成17年度公募日本分光学会奨励賞(2006.5.16)
- 速水 真也(化学部門・助手)(平成18年1月広島大に異動)
平成18年度 光化学協会奨励賞(2006.9.11)
- 網本 貴一(化学部門・助手)(平成18年4月広島大に異動)
平成18年度(2006年度)
有機合成化学協会九州山口支部奨励賞(2006.11)
- 亀 伸樹(地球惑星科学部門・助教)
平成19年度科学技術分野の文部科学大臣表彰若手科学者賞(2007.4.17)
- 久保 友明(地球惑星科学部門・准教授)
2006年度 日本高圧力学会奨励賞(2006.11)
平成18年度 文部科学大臣表彰 若手科学者賞(2006.4)
- 赤木 右(地球惑星科学部門・教授)
尾瀬賞(2007.6.29)(授賞式の日時、プレス発表は3月26日)
- 坂内 英一(数学部門・教授)
日本数学会2007年度代数学賞(2007.3.29)
- 入谷 寛(数学部門・助教)
第23回井上研究奨励賞(2007.2.9)
- 藤佐 庸(生物学部門・教授)
アメリカ芸術科学アカデミーの外国名誉会員(2006.10)



OB・OG
メッセージ
尾崎 彩さん
Aya Ozaki

生物学専攻修士課程17年度修了
協和発酵工業(株)

生物学科修了後メーカーに入社し、早1年が経ちました。6年間住み大好きになった九州を離れても、九大で得た人との繋がりは離れることなく、今や第二の故郷だと思っています。私の現在の仕事は、自社製品を売るための研究ですので縛りも多いですが、目的がはっきりしている分やりがいも大きいです。何よりも、会社では研究以外にも様々なバックグラウンドの人達が様々な視点で仕事をしているので、話をすると非常に面白いのです。プライベートではマラソンとゴルフを初体験。新しいところ顔を出す度に受ける刺激を楽しんでいます。

同窓会からのお知らせ

平成19年8月25日に東京ガーデンパレスホテル(東京)で理学部同窓会関東支部第4回同窓会総会ならびに懇親会を開催いたします。関東在住の卒業生の皆様にはご参加いただきますようお願いいたします。詳細は同封の同窓会からの案内をご覧ください。同窓生の増加に伴い経常的な負担の増大のため、次年度から同窓会費に年会費を導入する予定になっております。卒業生の皆様方のご負担をよろしくお願いたします。平成19年度の理学部同窓会長には宮原 三郎理学部長が内定しております。

理学部・理学府の就職支援

理学部の各学科では理学部卒業予定者に企業の採用担当者から直接説明いただく企業説明会を随時行っています。説明会を希望される場合は、各学科の事務室宛ご連絡下さい。就職担当教員から折り返し連絡いたします。

各学科の事務室の電話番号

物理学科	TEL 092-642-2541
化学科	TEL 092-642-2608
地球惑星科学科	TEL 092-642-2696
数学科	TEL 092-642-4201
生物学科	TEL 092-642-2643

新キャンパス移転情報

九州大学では、2004年9月に決定した旧移転スケジュールについて、全学教育の学習環境、教育研究機能円滑化および移転関連コストの観点より慎重なる検討を重ね、2006年9月に新たな移転スケジュールを決定しました。

従前の移転スケジュールからの主な変更点は、第Ⅱステージでの六本松地区の直接移転です。これによって、早期に全学教育に係る良好な学習環境の整備が可能となり、かつ教育研究が一層円滑に機能することとなること、また移転関連コストの削減も可能となることから、移転スケジュールを見直し、伊都地区へ直接移転することとしました。その他は従前の計画どおりです。(詳しくは九大ホームページをご覧ください)

■移転スケジュール(平成18年9月)

時期	第Ⅰステージ 平成17~19年度	第Ⅱステージ 平成20~23年度	第Ⅲステージ 平成24~31年度
伊都 キャンパス への移転	工学系I・II 理系図書館I 【約4.3千人】	全学教育、比較社会文化、言語文化、 数理学研究院、理学部数学科、 理系図書館II、高等教育関連推進センター他 【4.6千人】 基幹整備及び新手法による整備 ←用地再取得 平成25年度完了→	理学系(H26) 情報基盤センター(H27) 中央図書館(H29) 文系(H29、H30) 農学系・その他(H31) 【約6.7千人】

※()内数値の移転年度は、財政状況により変動することがあります
※【 】内数値は移転人数の概数を示しています

定年退職者

次の6名の先生方が2007年3月31日をもって退職されました。

物理学科	川口 尚	物理学科	御手洗 志郎
化学科	小山 弘行	化学科	清水 宣次郎
生物学科	原野 友之	附属極低温実験室	副島 力

新任教官

次の6名の先生方が2007年4月1日より着任されました。

物理学科	前田 幸重	化学科	宇都宮 聡
化学科	岡部 哲士	地球惑星科学科	中川 貴司
数学科	津田 照久	生物学科	広津 崇亮